

大官大寺南方の調査

—第199・203次

1 はじめに

調査の目的と経過 藤原京左京九条四坊・十条四坊に位置する大官大寺は、6町占地の官寺である。その南方、具体的には南の県道124号榎原神宮東口停車場飛鳥線（山田道）とに挟まれた地域の様相を解明するため、2017年度から試掘調査と地下探査を併行して実施する計画を進めている。

ここでは、2018年度に実施した第199次調査の報告を主とする。2019年度実施の第203次調査については概要を示すにとどめ、詳細は次年度の紀要で報告する。

調査区の位置と調査期間 第199次調査の試掘調査地点は、藤原京左京十一条四坊西北坪に位置する（図142）。大官大寺の中軸線のやや西側で、十条大路南側溝の想定位置に設定した。

調査区は南北12m×東西5mで設定し、後に調査区の東北隅部を南北5.5m×東西1mの範囲で拡張した。調査面積は65.5㎡である。調査期間は2019年1月15日から1月26日までである。

2 検出遺構

基本層序 現在の水田面下には10cmの耕作土、25cmの床土があり、床土直下の灰黄色シルト層上面で遺構を検出した。遺構検出面は、地表下35cmである。なお、調査区北半では床土と灰黄色シルト層との間に、灰褐色土と黄褐色土の包含層が認められる。

主な検出遺構は、整地土、東西溝1条、掘立柱建物1棟、自然流路1条である（図144）。

整地土SX4570 調査区北端で確認した暗褐色の整地土で、厚さは10～20cmほど。下層の灰黄色シルト層が北へ向かって低くなっており、その低くなった箇所に土を盛って整地して、平坦にしたようである。南端の境目が、東西溝SD4571と併行するように、ほぼ正方位にのる。7世紀半ばごろの土器が出土。

東西溝SD4571 調査区の中央付近で検出した、主軸がほぼ正方位に合う東西溝。幅70cmで、残存する深さは25cm程度。埋土は黄灰色粘質土で、人為的に埋め立てた

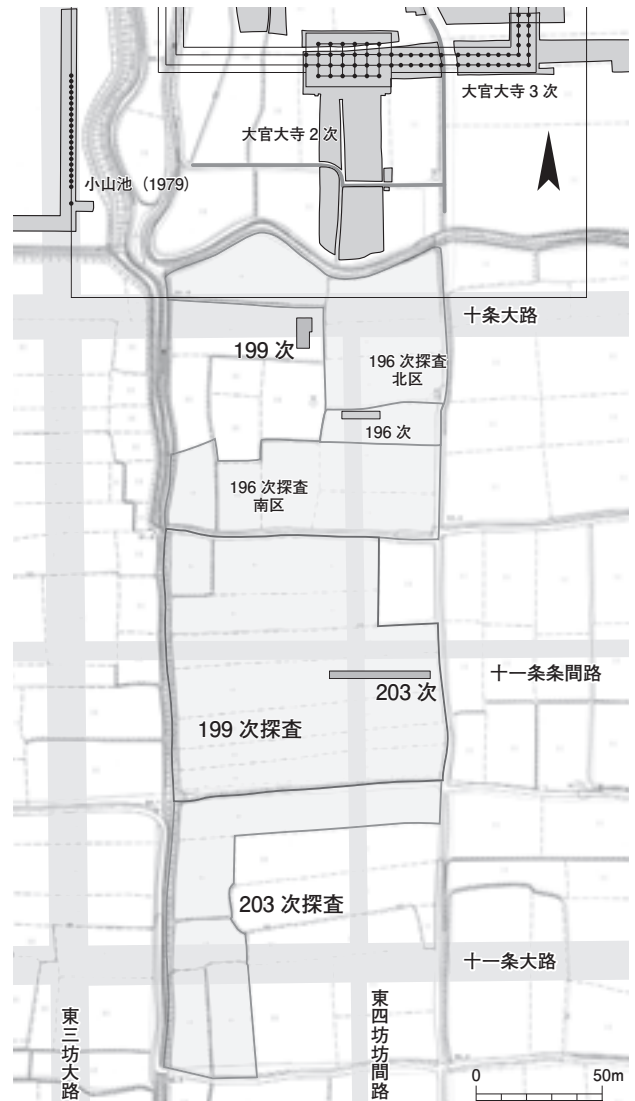


図142 第199・203次調査区 1：3000



図143 整地土SX4570・東西溝SD4571の検出状況（西から）

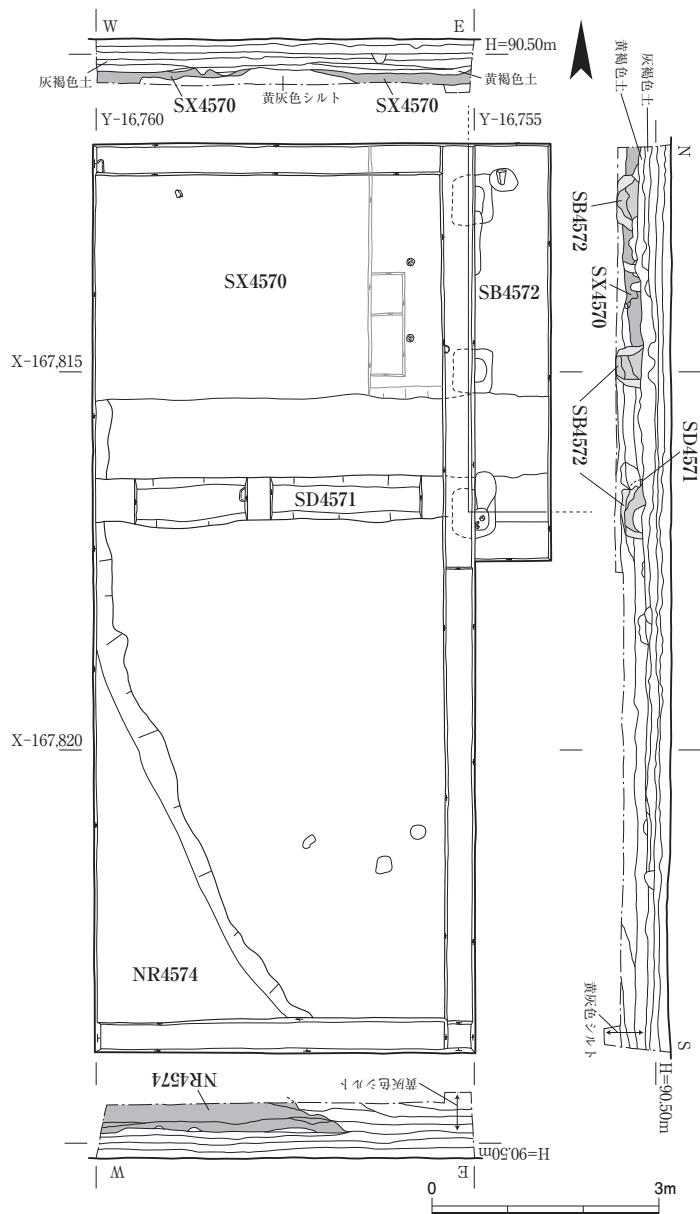


図144 第199次調査区遺構図・土層図 1:100

と判断できる。溝底にも水成の堆積土は確認できず、顕著な水流があったとは考えにくい。埋土から、7世紀後半の土器が出土した。なお、後述するように、十条大路南側溝となる可能性はあるが、慎重を期したい。

掘立柱建物SB4572 南北にならぶ3基の柱穴を検出した。堀の可能性もあるが、建物と理解しておく。掘方は一辺70cmで、深さ30cmほどが遺存する。柱間寸法は2.1m（7尺）。整地土SX4570を掘り込んでおり、東西溝SD4571と重複し、それより新しい。

自然流路NR4574 北西に向かって流れる旧流路。東岸を検出したのみであるが、幅5m以上になると思われ



図145 第199次調査区全景（南西から）

る。また、底も確認していないが、深さ50cm以上となる。埋土は、下層が灰色の砂礫層で、水流による自然堆積層である。上層は厚さ10cmほどの暗褐色砂質土であり、人為的な埋立て、土壌化したような印象を受ける。弥生時代後期の土器が出土。

（和田一之輔）

3 出土遺物

瓦磚類 丸瓦4点、平瓦6点が、整地土SX4570を覆う黄褐色土および床土から出土した。いずれも小片であり、時期を判断できる資料はない。総量0.76kg。（道上祥武）

土器 弥生時代後期の土器を中心に、古代の土師器・須恵器などが整理用木箱にして2箱分出土した（図146）。

東西溝SD4571からは少量ながら、7世紀後半の土器・須恵器が出土した。2は土師器の杯C。口縁部をヨコナデで調整する。外面底部は不調整。内面には一段放射暗文を施す。整地土SX4570からは7世紀半ばごろの土師器・須恵器が出土した。3は土師器の杯C。口縁部をヨコナデで調整する。外面には口縁部にミガキ、底部にはヘラケズリ調整を施す。内面には一段放射暗文を施す。

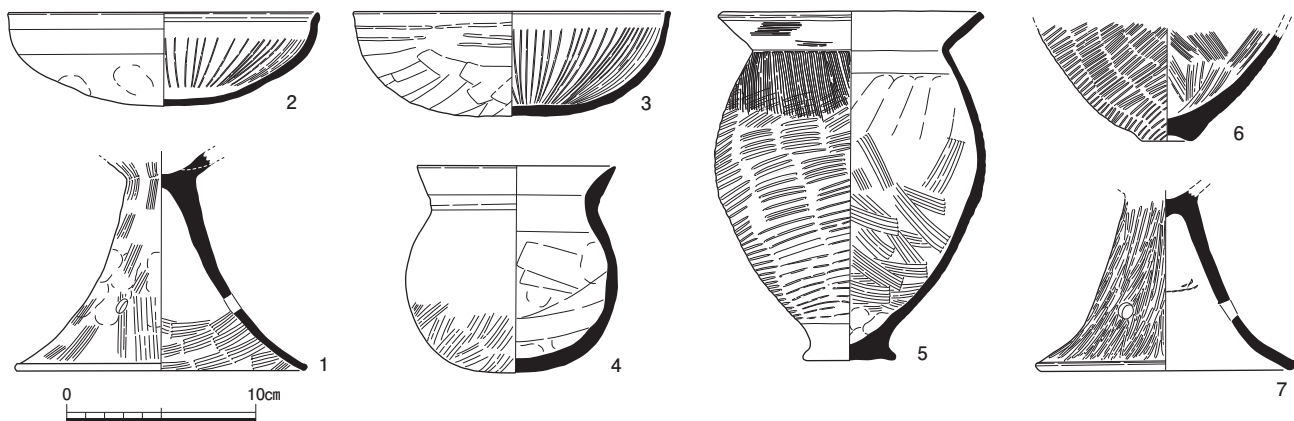


図146 第199次調査出土土器 1 : 4

4は土師器の壺。外面底部には成形時に押し当てたタタキ具の痕跡が残る。内面の体部から底部をヘラケズリで調整する。

自然流路NR4574からは弥生時代後期の土器が出土した。5は甕。外面の口縁部にはナデ調整後にハケ調整を施す。体部全体をタタキで成形した後、外面の体部上部と内面の口縁部から体部にハケ調整を施す。内面の底部には指頭痕が残る。6は深鉢。口縁部を欠く。外面体部には成形時に用いたタタキ具の痕跡が明瞭に残る。内面はハケ調整。7は高杯の脚部。杯部を欠く。7の外面調整は密な縦方向のミガキ。内面には成形時のシボリ痕跡が残る。下半には焼成前に計4カ所の円孔透かしを穿孔する。このほか、包含層からも弥生時代後期の土器が出土した。1は高杯の脚部。外面はハケ調整で、内面下半もハケで調整する。

(土橋明梨紗)

4 第199次試掘調査のまとめ

条坊道路側溝 本調査で検出した、7世紀後半の東西溝SD4571が、十条大路南側溝とみなせるかどうかが焦点となる。これまでに大官大寺付近で検出された条坊道路は、講堂下の東西溝SD517が九条大路北側溝の可能性がある」と指摘された1例のみである（『藤原概報 10』）。一昨年度の飛鳥藤原第196次調査でも、東四坊坊間路の推定地での調査であったが、その検出には至らなかった（『紀要 2019』）。

このように香具山以南の大官大寺付近で条坊道路が確認されない状況は、小澤毅が指摘するところである。小澤は、「京域のすべてに条坊が敷かれたわけではなく、大和三山をはじめ、香具山南東に広がる丘陵地帯にも条

坊の痕跡はまったくない」と指摘し、「施工について現実的な対応が図られた」と述べる¹⁾。

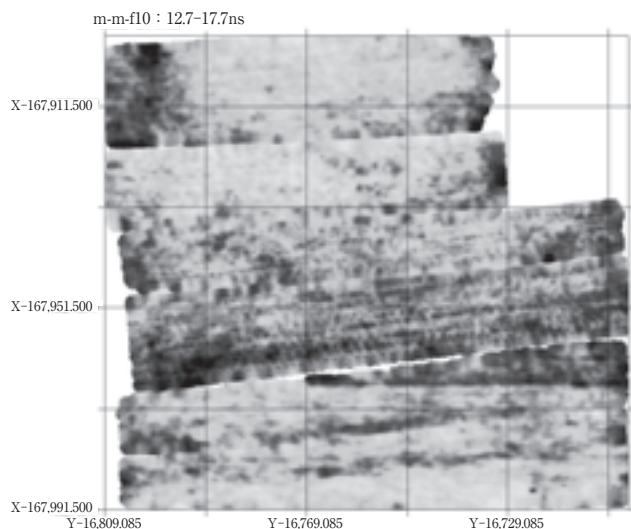
京域にまで視野を広げれば、十条大路の確認例は4カ所あるが、左京域では十条一坊の1例のみである²⁾。十条大路は検出例が少ないものの、想定位置を仮に算出すれば、本調査区付近では十条大路の道路心の推定座標は $X = -167,811.2$ 、南側溝心が $X = -167,819.5$ となる。南側溝の可能性のあるSD4571の溝心は $X = -167,816.7$ なので、推定位置から約3m北にずれる。

今回の調査では、両側溝を検出したわけではなく、また推定位置とのずれも一定程度認められるので、SD4571を条坊側溝と即断することはできない。香具山以南における条坊施工の有無を含め、今後の調査の進展を俟って慎重に判断したい。

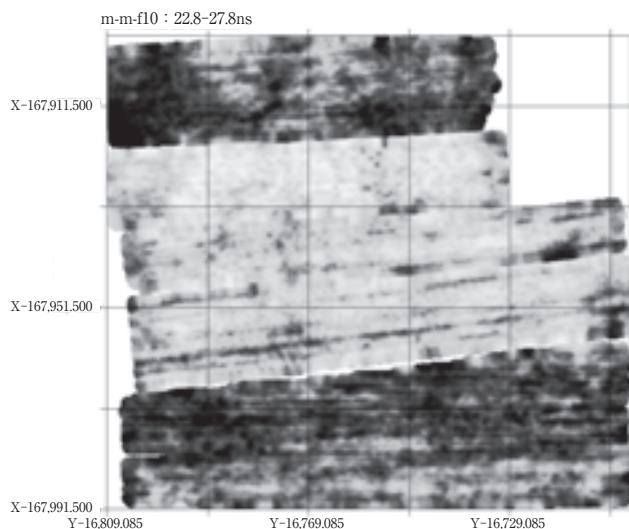
周辺の旧地形と土地利用 飛鳥藤原第196次調査では自然流路NR4562を検出し（『紀要 2019』）、本調査でも弥生時代後期の自然流路NR4574を確認した。丘陵に囲まれた当地は北西に向かって低くなる地形で、そこに幾筋もの自然流路が流れていたのだろう。いずれの自然流路も最終的には人為的に埋め立てられており、それは7世紀後半の時期にあたると思われる。本調査区の北端で7世紀半ばごろの整地土SX4570を検出したが、すべて一連の可能性はある。大官大寺の造営あるいは条坊の敷設にともなって、当地の整地が進められたのかもしれない。

また、大官大寺南方では、ほぼ正方位に揃えた、柱間7尺程度の建物や塀が展開する様子がわかってきた。とはいえ、小規模な発掘調査では実態の把握は難しい。大官大寺あるいは条坊との関連を含めて、さらなる調査の進展を俟ちたい。

(和田)



1 地表下の浅い部分（地表下約45cm）



2 地表下の深い部分（地表下約75cm）

図147 第199次GPR成果 1:1500

5 第199次地下探査の成果

探査の概要 昨年度に続き、大官大寺南方の地中レーダー探査（Ground Penetrating Radar）を実施した。対象地は、昨年度に実施した範囲の南側約10,000㎡とし、日程は2019年2月18、20、21日の3日間である。

使用機材は昨年度と同様で（『紀要 2019』）、マルチチャンネルGPRであるStreamX200（IDS社）を用いた。中心周波数は200MHz、アンテナ間の計測間隔は0.12mである。解析には、GPR-SliceV7.0（Geophysical Archaeometry Laboratory）を使用した。水に影響されたと考えられるノイズが高周波部分に存在することから、Bandpass処理をおこないノイズにあたる帯域のデータを除去した後、Background Filter処理をおこなった。成果は、Time Slice法を用いて平面における異常物の位置と形状の表示をおこない、断面を示すプロファイル画像とあわせ、考古学的な視点により比較検討することとした。

探査対象地はきわめて軟弱な部分があるとともに、探査時には地表面に水溜まりが部分的にみられ、厳寒期のため一部が凍結した状況であったため、探査条件は良好ではなかった。位置情報の計測はRTK-GPSによるが、南北に基準線を設定し、東西に計測線を張って走査をおこない、往復後に北へ1.5m移動して再び計測を繰り返した。なお、探査は、現状の水田の区画にあわせて3区

画に分割しておこなった。もっとも南の区画は東西方向に、それより北側の2区画は水田の地割にあわせて探査をおこなった。

探査の成果 地形は南側に高くなり、区画に応じて地表の水分の状況が異なる。このような条件により各地区で結果が大きく異なる。

浅い部分（地表下約45cm）においては、南側の調査区では2本の並行する溝状の反射が注目される（図147）。レーダーの走査方向とは角度が異なっており牽引に際してのノイズではないことから、何らかの遺構の可能性が高い。これは現状に存在する水田の畦を挟んで南北に存在しており、この畦やそれ以前の水田にともなう可能性もあるが、古代の道路などの区画に関連する可能性が指摘できるだろう。

深い部分（地表下約75cm）では、明瞭ではないものの、Y=-16,769およびY=-16,750付近に南北方向に弱い線状の反射が続いている。また、X=-167,908、Y=-16,769付近から東西、南北に点状の反射が存在する。これらが何を示しているのか、発掘調査などによる検討が必要であろう。

（金田明大）

6 第203次調査の概要

試掘調査 調査地点は、藤原京左京十一條四坊東南坪と同西南坪に位置する。東四坊坊間路の想定位置に、南

北3m、東西40mの調査区を設定した。調査面積は120㎡、調査期間は2020年2月3日から3月16日までである。

基本層序は、上から順に耕作土、床土、整地土（褐色土と暗褐色土）、基盤層（黄褐色土、粗砂および礫層）となる。ただし、調査区東半では基盤層の標高が高くなり、暗褐色土がごく薄くなる。遺構検出は褐色土、暗褐色土あるいは黄褐色土上面でおこなった。

褐色土上面では、調査区西半で鎌倉時代の土師器を含む南北溝1条を検出した。幅約1.3m、深さ約30cm。そのほかに、現在の地割に沿う多数の耕作溝を検出した。

褐色土の下層では、調査区中央ないし東半で遺構の検出面が異なる。東半では、褐色土下の黄褐色土上面で、南北溝1条、やや斜行する東西溝1条、柱穴列1条、性格不明の土坑4基を検出した。南北溝の幅は60～80cm、深さ25cm以上で、ほぼ正方位となる。東西溝は幅2.2m以上、深さ約50cmで、総長13m分を検出した。埋土からは土師器や須恵器、燃えさし、加工木のほか、モモ核、ウリ種実、クルミなどの植物遺存体等が出土した（図149）。東西溝の時期は7世紀前半代とみられる。いっぽう、調査区中央では、褐色土下の暗褐色土上面で南北溝1条を検出した。幅約2.2m、深さ約25cm。先述の東西溝を切り込む。

本調査の結果、山田道よりも北方に7世紀前半代の遺構が展開する可能性が高くなった。また、調査区中央と東半で検出した2条の南北溝はともに7世紀前半の東西溝よりも新しく、7世紀後半と考えられ、東四坊坊間路の側溝となる可能性が残る。ただし、いずれも今後の継続的な調査が必要である。

地下探査 地中レーダー（GPR）を用いた探査は、第199次調査で実施した場所の南側、約11,000㎡を対象とした。ただし、探査時には地表面に水溜まりが部分的にみられるなど諸々の制約が生じたため、実施できたのはこのうちの一部にとどまる。

探査の実施日は2020年1月31日、2月3日の2日間である。
(片山健太郎)

註

- 1) 小澤 毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003。
- 2) 奈文研『藤原京研究資料（1998）』1999。



図148 第203次調査区全景（北東から）



図149 第203次調査東西溝の遺物出土状況（北東から）